



これから求められる臨床検査技師像 ～大学病院と一般病院を経験して～

徳 永 尚 樹

(社会医療法人川島会 川島病院 検査室)

はじめに

私が臨床検査技師という職業を知ったのは高校1年生の時でした。当時アルバイト先に某大学の検査技術科学専攻に通う先輩がおり、アルバイトの休憩中に大学のレポートを書いているのを見て色々教えてもらったのをよく覚えています。それが私の臨床検査との出会いでした。今思えば初めて知る血液の役割や免疫のメカニズム等の人体の不思議に好奇心を掻き立てられ、臨床検査技師を目指す人はこんな面白い勉強をするんだと興味を持ち始めたのがこの世界に入るきっかけだったように思います。

I. 臨床検査技師の仕事

臨床検査技師の仕事とは何か。学校で臨床検査を学んだからといって皆が臨床検査技師になるとは限りません。病院以外の就職先として、大学院に進学し、そのまま教員として大学に勤める者、そこから製薬会社や検査機器・試薬製造販売会社に就職する者、また、病院ではなく、臨床検体を複数施設から集配して何百、何千とある検体をまとめて測定する検査センターへ就職する者等、進路は様々であります。しかし、これらの仕事は厳密に言えば臨床検査技師という仕事をしているわけではありません。「臨床検査技師」とは「臨床」つまり、実際目の前にいる患者に対して検査を行う仕事であり、「臨床検査技師」という国家資格を有する者が、医師の指示の元、採血をはじめ血液検

査等の検体検査や、心電図、超音波検査等の生理検査を行い、検査結果を報告することが臨床検査技師の役目であります。そうして得られた結果をもとに医師が患者を診療し、治療や処置を行うことで患者のQOLが改善されていくわけでありませぬ(図1)。しかしその検査結果が信頼性の低いものであったらどうなるでしょうか。誤った結果が報告されることで患者に間違った診断が下り、間違った治療や、不必要な処置が行われてしまうこととなります。そのようなことが起こらないよう、我々臨床検査技師は責任をもって検査データを管理し、信頼性の高い検査結果を臨床へ報告する義務があります。このような質の高い検査結果を報告することが臨床検査技師の重要な役目であり、医師との信頼関係を築くことにも繋がるのです。

II. 大学病院における臨床検査技師の役割

臨床検査技師の役割は病院の規模により異なってきます。私は研究に興味があったため徳島大学を卒業後、徳島大学病院に就職しました。希望していた血液検査室に配属され、知識や経験が豊富な先輩や上司に恵まれたことで、業務のみならず、学会活動や研究についても色々貴重な経験をさせていただきました。大学病院の良いところは検体数が多く希少症例を含め、様々な症例を経験できることです。また、最新の自動分析機が並び、院内測定項目が多いことも大きなメリットであります。大学病院では、血液検査室や一般検査室、生化学検査室等、分野ごとに部屋が分かれており、

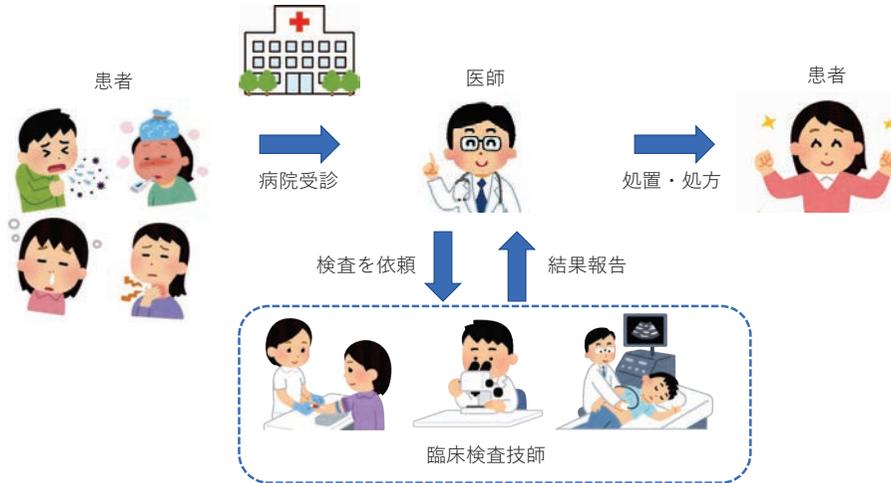


図1 臨床検査技師の仕事

その分野の専任がいます。大学病院では専門性に特化することが重要であり、研究等の学術活動は重要であります。学会や論文で最新の情報をアップデートし、研究を通して新しい知見を発信していくことも大学病院に勤める者として大事な役割だと思います。特に国際学会に参加したことは私の大きな転機となり、かけがえのない経験が今のフィールドワークに繋がっています(写真1)。国際学会に参加し、最先端の研究やTOPIXを得ることで、大きく視野が広がりました。専門的な技術と知識を備え、臨床の先生方と対等にディスカッションやアドバイスができることが大学病院で求められる臨床検査技師像であると思います。

III. 一般病院における臨床検査技師の役割

大学病院で経験を積み、血液検査技師として10年を過ぎた頃、私を育ててくれた上司と、今まで色々と指導してくれた先輩が退職されたのをきっかけに、私も大学を離れることを決意し、一般病院に移りました。現在勤めている川島病院は、大学病院でお世話になっていた前検査部長と前検査技師長が大学病院を定年退職後に勤められていたことも後押しとなりました。川島病院は透析病院として名高く、蛋白尿から腎移植まで自施設で行っていることもあり、慢性腎臓病については大学にも劣らない症例数があることで、一般病院

では珍しく研究等の学術活動に力を入れているというところに私の好奇心が掻き立てられました。大学では透析という分野に関わってこなかったこともあり患者データの特徴を捉えることが難しいですが、逆を言えば透析の分野を開拓するチャンスでもあります。大学病院と最も異なるところは一人が特定の分野だけを担当するのではなく、血液検査や一般検査、輸血検査に至るまで幅広く担当することです。一患者を見るにあたり必要な知識は大学も一般病院も同じであり、一般病院だから決して異常を見逃してよいわけではありません。一般病院ではむしろ大学病院よりもデータを総合的に考える力が養われます。それが臨床検査の面白さであり、本来の臨床検査技師のあるべき姿だと思います。私は一般病院に移ってからの2年間で様々な血液疾患をスクリーニングし、迅速な診断と治療に貢献してきました(写真2)。大学に比べたら圧倒的に希少疾患の症例数は少ないですが、一般病院でも知識と経験があれば異常をスクリーニングできることを実感しています。大事なのは異常を疑う姿勢や異常を見つけるための知識と洞察力であります。

IV. これからの臨床検査技師に求められること

近年、臨床検査技師の仕事として外来や病棟等で医師や看護師、コメディカルと協力して行う業



写真1 国際学会への参加風景(徳島大学病院時代)

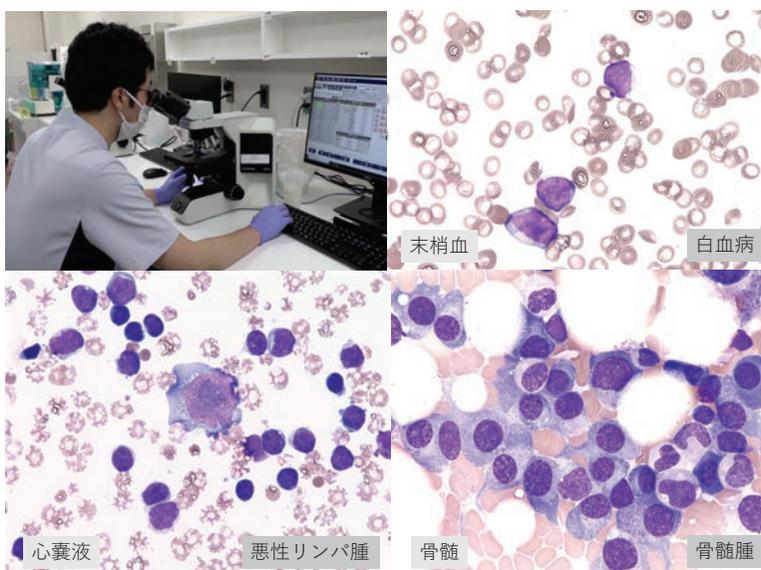


写真2 検査室からの報告が診断に結びついた例(川島病院)

務が増えてきています。現在も日本臨床衛生検査技師会は臨床検査技師の業務拡大を掲げ、医師やコメディカルからのタスクシフトを推進し、内視鏡検査の補助や心臓カテーテル検査の補助、病棟採血を含めた検体採取業務等の業務拡大が進んでいます。また、医師の分業化が進み、専門分野以

外の疾患については何を検査したらよいかかわからない医師が多くなっています。そんな中、臨床検査技師は一つの分野に特化しているだけでは不十分であり、複数の検査データから総合的に病態を把握し、臨床側に的確なアドバイスを提供することが求められます。また、医師や看護師をはじ

め他職種との連携が必要になることから、コミュニケーションスキルを磨くことも大切です。

幅広い知識と専門的なスキルを磨くためには常に自分の知識をアップデートすることが必要であり、積極的に学会や勉強会に参加することや専門分野の認定資格を取得することも大事なことです。学会は単に知識を得る場所だけではなく、他施設の技師や医師との情報交換や交流の場でもあります。このような場で知り合った仲間は日々の業務で疑問に思ったことの相談役になったり、様々な技師人生のプラスになりますし、同じ志を持つ仲間がいることがモチベーションの維持にも

つながります。私は理解ある先輩や上司に恵まれたこともあり、まだ半人前の頃から積極的に学会や研修会に参加したり、研究や発表する機会を頂いたことをきっかけに出会った先生方や仲間のおかげで今の自分があると思っています。

おわりに

医療業界の進歩と共に臨床検査も年々進歩しています。常に向上心や好奇心を持って業務にあたるのが技師としての経験値を増やす近道となります。本誌により臨床検査技師の重要性が少しでも読者の皆様に伝われば幸いです。